

阿里園六轡『俳諧七部集』注解（一）

—『春の日』『冬の日』『ひさこ』—

伊藤 善隆^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス学科

【キーワード】

俳諧 六轡 芭蕉 俳諧七部集 春の日 冬の日 ひさこ 古注

はじめに

本稿では、阿里園六轡による『俳諧七部集』の注釈（個人蔵、文化十三年（一八一六）奥）を翻刻する。

六轡は化政期に活動した俳人で、長齋編『万家人名録』（文化十年刊）に「松本氏、号阿里園、俗称源三、信州人、来居于浪華」と見える。また、奇測編『わすれぐさ』（文化二年（一八〇五）頃刊）付載の人名録には「浪花蟻園」とあり、平林鳳二・大西一外『新選俳諧年表』（書画珍本雑誌社、大正十二年刊）によれば、梅室門で天保元年（一八三〇）に没したという。

本書は、『俳諧七部集』（寛政七年再刻本）の版本に朱筆で書き込まれたもので、最終巻の最終丁裏には「依所望七部集中秘事口傳委不残解釋 阿里園六轡 于時文化十三年丙子晚秋」（朱筆）とあり、文化十三年九月に記されたことが分かる。もともとは七冊本の『俳諧七部集』すべてに注解が施されたと推定されるが、伝来の過程で

『猿蓑』が失われたらしく、残念ながら現在はその一冊のみ、注釈の記されていない別の七部集本が補配されている。

近世後期における芭蕉研究の流行と進展は、当時の俳諧・俳壇を特徴づける重要な要素である。本書もまた、その実例の一つとして貴重な存在であると指摘することができる。

なお、今回の掲載は、『俳諧七部集』のうち、『春の日』『冬の日』『ひさこ』の三作品を収録する第一冊目のみとし、以降については後日の翻刻を予定する。

書誌

〔書型〕半紙本七冊。（但し、『猿蓑』は取り合わせ。）

〔大きさ〕二二・五糎×一六・〇糎。

〔表紙〕原装。緑色布目小菊紋。（但し、『猿蓑』のみ縹色表紙。）

〔題簽〕原題簽。左肩単辺。（但し、『猿蓑』のみ後補書き題簽。）

〔俳諧七部集 春の日／冬の日／ひさこ 一〕

〔俳諧七部集 炭俵 二〕

〔俳諧七部集 猿蓑 三〕

〔俳諧七部集 続猿蓑 四〕

〔俳諧七部集 阿羅野 五〕

〔俳諧七部集 阿羅野 六〕

〔俳諧七部集 阿羅野／附員外 七〕

〔見返し〕「俳諧七部集」

〔奥書〕「依所望七部集中秘事口傳

委不残解釋

阿里園六轡

于時文化十三年丙子晚秋

〔刊記〕「 諧仙堂蔵版「諧仙／堂」（朱文方印）

寛政七年乙卯春三月再刻

筒井庄兵衛 梓

皇都書林 浦井徳右衛門

野田治兵衛 行

芭蕉翁

俳諧七部集統編

深田卯辰集有職雜歌並山
額ふたき芭蕉翁小文字庫十冊

小刻全部二冊出来」

凡例

『七部集』版本の本文と、朱筆で書き込まれた注釈とを区別するため、朱筆部分は「」で括り、フォントを変えて示した。また、改行や文字の配置は適宜変更した。

注釈は表記や訓みに及ぶ場合もあるため、用字はなるべく原本に近い字体を用いた（但し、厳密ではない）。また、清濁も原本に従った。濁点のない版本の平仮名に、朱筆で濁点を付してある場合は、濁点を付したその平仮名全体を「」で括って示した。すなわち、「だ」としたものは、版本には「た」とあるところに、朱筆で濁点を振って「だ」としたものである。

訓みを示すために、漢字に濁点を朱筆で書き加えた箇所がある。これを「三人」のように示した。

原本の版面の状態（版木の欠損や摺りむらなど）や、字体によって読みにくい箇所には、朱筆で補筆や描き直しをした箇所がある。その場合は※印を付し（）で括って注記を加えた。

変体仮名の字母によって詠みづらい場合に、訓みを朱筆で振った

箇所がある。たとえば、「帝」を字母とする変体仮名に「テ」と訓みを注記した箇所がある。そうした場合は、「帝」に「テ」とルビを振って示した。

漢字の書体や崩し字によって読みづらい場合に、あらためて漢字を書き添えた箇所がある。そうした場合は、「四方」や「書」のように、漢字に漢字のルビを付けて示した。

注釈は版本に書き込まれていくため、朱筆部分が注を付けるべき箇所から離されて記される場合がある。その場合、原本では注と本文を結びつけるために「○」などの印が付される場合がある。翻刻では、改行や文字の配置を変えて、注は本来付けるべき箇所に近づけて翻刻したが、こうした記号は残した。

その他、必要に応じて、※印を付し（）で括って注記を示した。巻末に参考図版を付した。

〔翻刻・「春の日」〕

曙見んと人アの戸ア扣アきあひて熱田アのかたにゆき
ぬ 渡し舟さハかしくなりゆく比 并松のかたも
見えわたりていとのかなり 重五か枝折をける
竹ア牆アほとちかさにたちより けさのけしきをおも
ひ出侍る

〔早尾州 舞ナリ〕（※原本「熱田」の上部に書き込む。）

「（ウ）」

二月十八日

春めくや人さまアの伊勢まいり

荷ア兮ア

〔前書ト發句ノヨクソヒヨクハマリタルヲシルヘシ

ミナカクノコトクアリタシ〕

桜ちる中馬ながく連^{〔ル〕}

重五^{〔オ二〕}

山かすむ月一時に館立^{〔ア〕}て

雨桐

〔館^{イヘ} ヨシアル家ナリ〕

鎧ながらの火にあたる也

李風

〔異躰^{コトナウ}ナレトモ天子供奉ナトノケシキオノツカヲ穂ナリ〕

しほ風によくく聞ハ鷗なく

昌圭^{〔ウケケイ〕}

〔場ヲツケタリ〕

くもりに沖の岩黒く見え

執筆^{〔オ二〕}

須^ウ戸寺に汗の帷子脱かへむ

重五

をのく^{イタク、ウ}なミた笛を戴^ウく

荷兮

文王のはやしにけふも土つりて

李風

〔周ノ文王ナリ 霊臺霊沼ヲツクリテ樂ヲ民ト、モニス〕

雨の雫の角^{〔ウ〕}のなき草

雨桐

肌寒ミ一度ハ骨をほとく世に

荷兮

〔誰シモ一度ハ死ヌト云事ナリ〕

傾城乳をかくす晨明^{〔ウリナヒ〕}

昌圭

霧はらふ鏡に人の影移り

雨桐

わやく^{ミコシ}とのみ神輿かく里

重五^{〔ウ二〕}

〔カ、ミニ人影ノウツルト云ルヨリ 神祭ト見出しタリ〕

鳥居より半道奥の砂行て

昌圭

〔※原本「て」の欠損を朱で補筆。〕

花に長男の昏鴛あぐる比

李風

〔男子十五已上ヲ男ト云〕

柳よき陰ぞこゝらに鞠なきや

重五

入かゝる日に蝶いそぐなり

荷兮

二 うつかりと麥なぐる家に連待て

李風

かほ懐^{〔アツコ〕}に梓^{〔アツサ〕}きゝゐる

雨桐

〔巫女ノ類七霊ヲ閣托ス〕

黒髪をたばぬるほとに切残し

荷兮

いともかしこき五位の針立

昌圭^{〔オ二〕}

〔醫に官位ヲ給リシ也〕

松の木に宮司が門はうつふきて

雨桐

はだしの跡も見えぬ時雨ぞ

重五

〔素足〕

朝朗^{〔アサハラウ〕}豆腐を鶯にとられける

昌圭

念^{〔ネ〕}仏さふけに秋あはれ也

李風

穂^{〔ホ〕}蓼生ふ蔵を住るに佗なして

重五

我名を橋の名によはる月

荷兮

〔俗ニヨクアルコトナリ〕

傘の内近付になる雨の昏に^{〔アジ〕}

李風

朝熊^{〔アサクマ〕}おるゝ出家^{〔トリス〕}ほくく

雨桐

〔アサクマ 勢州山田ナリ〕

ほとときす西行ならば歌よまん

荷兮

釣瓶ひとつを二人してわけ^{〔カ〕}

昌圭

世にあはぬ局^{〔ツボネ〕}涙に年とりて

雨桐

〔※原本「世」の欠損を朱で補筆。〕

〔戀ナラス述懐也 春季ナリ〕

記念にもらふ嵯峨の苜畑^{〔カサヒ〕}

重五

〔死テノチ親シキモノヘノコシツカハス事〕

いく春を花と竹とにいそがしく

昌圭

弟も兄も鳥とりにゆく

〔雑ナリ〕

(白紙)

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重さくら

おもしろふかすむかたの鐘

(※原本「く」の濁点と欠損を朱で補筆。)

春の旅節供なるらん袴着て

〔天子ノ御供 又ハ天子ノ召上ル食物ノルイ〕

口すくへき清水ながる、

松風にたをれぬ程の酒の酔

〔四五句ノハコヒ 風躰姿情妙ナリ〕

売のこしたる虫はなつ月

笠白き太秦祭過にけり

菊ある垣によい子見てをく

表町ゆづりて二人髪剃ん

暁いかに車ゆくすじ

鱧負ふて大津の浜に入にけり

何やら聞ん我國の声

旅衣あたまばかりを蚊やかかりて

萩ふみたをす万日のはら

里人に薦を施す秋の雨

月なき浪に重石をく橋

〔俗ニ云ヲモシナリ〕

ころひたる木の根に花の鮎とらん

李風

〔(オ四)〕

〔(ウ四)〕

〔轉ナリ 俗ニ云ケケルト云事〕

〔諷尽せる春の湯の山

〔湯泉ノアル山ナリ〕

二のつけしや筑紫の袂伊勢の帯

〔諺ニツクシノ男イセノ女ト云 貴賤打混シタルサ

マ也〕

〔室女ノコトナリ 内侍のえらふ代々の眉の図

〔古代ヨリ眉ノツクリ方ヲ吟味スルト云事也〕

物おもふ軍の中は片わきに

名もかち栗とぢ、申上ケ

〔根文ノコトナリ 〕

〔大年は念佛となふる恵美酒棚

ものごと無我によき隣也

〔朝夕の若葉のために枸杞うへて

〔(※原本「朝」の欠損を朱で補筆。)

〔宮古に甘日はやき麦の粉

〔ムキノコ 農家ニ用ルモノ〕

〔一夜かる宿は馬かふ寺なれや

こは魂まつるきさらさの月

〔法會ナドスル事 春ノドカナル時ニハカナキコト

〔アトノ月ト云ルイナリ〕

〔陽炎のもえのこりたる 夫婦にて

〔春雨 袖に御哥いたく

〔此表ニ月ナシ〕

〔田を持って花みる里に生けり

〔力の筋をつきし中の子

〔漣や三井の末寺の跡とりに

且藁

越人

荷兮

羽笠

野水

且藁

越人

荷兮

羽笠

野水

且藁

野水

且藁

此月

越人

荷兮

越人

羽笠

野水

且藁

〔連トハアフミトイハンカブリコトハナリ〕

高びくのミぞ雪〇所の山々

見つけたり廿九日の月さむき

〔コノトコロニ月ヲ出ス〕

君のつとめに氷ふミわけ

(白紙)

三月十六日 旦藁が田家にとまりて

蛙のミきゝてゆゝしき寐覚かな

〔挨拶ノ句ナリ 亀鑑トスヘシ〕

額にあたるはる雨のもり

〔コレマタ謙退卑下ノワキ也 ヨク味フヘシ〕

蕨ワラビニ煮る岩木の臭き宿山家タケル上云事かりて

まじく人をミたる馬の子

立てのる渡しの舟の月影に

〔ミタル馬ノ子ト云ヨリ其場ヲノカサスツケシナリ〕

芦の穂を摺る傘の端

〔アシラヒナリ〕

磯イソぎハに施イソ餓鬼の僧の集りて

〔秋季ナリ〕

岩のあひより蔵間ミゆる里

雨の日も 瓶モタイ 壺ノコトナリ 焼ヤクやらん煙たつ

ひだるき事も旅ナラヒトヨムヘシの一つツツに

尋アソブよる坊主ハ住まず錠ツツおりて

〔行脚雲水ナトノサマナリ〕

解トクてやをかん枝エダむすふ松

越人

荷兮

羽笠

野水

旦藁

越人

荷兮

冬文

執筆

野水

荷兮

冬文

〔ルスト云ルノアシライ眼前見ユルゴトシ〕

今宵ハ更ツケたりとてやみぬ

同十九日荷兮室箱ト云事にて

〔前ノ連句ヲ次ク〕

咲ウキわけの菊キクにハおしき白露シラツキぞ

秋アキの和名ワナにかゝる順シツカズ

〔順 人ノ名ナリ 和名抄ヲ撰フ 藤原元輔同時ノ

人後撰集ノ選者 梨壺五人ノウチ〕

初ハジメノ声コエにみづから火ヒを打ウぬ

別ワカレの月ツキになナみたミたタあらはせ

〔戀ナリ〕

跡アトぞ花ハナ四ヨの宮ミヤよりハ唐輪カラウにて

〔四ノ宮 近江大津也 此頃日枝山門ノ童髮ヲ唐輪

ニユヒシ コレヲ都ニ見ナライ一流ニカラワニユ

フ 四ノ宮ノ遊女モ又カラワニユフ シカシコノ

ト云事ナリ 故ニアトゾ花トハ云ルナリ〕

春ハルゆく道ミチの笠カサもむつかし

二 永トコき日ヒや今朝キノフを昨日キノノに忘ワスレるらん

實ウチの子コ茸キノ生ナふる五月雨ウチトヨムヘシの中

紹シウ鴉カか瓢ヒヤウはありて米コメハなく

〔千利休同時ノ人ニテ 専茶湯ノ風流ヲ愛ス 價千

貫ノ瓢ヲ買テ愛ス〕

連ツラ哥カのものモノにあたるアタルいそがし

瀧タニ壺ヒに柴チ押オシまけて音ネとめん

岩イハ苔コケとりの籠カゴにサげられ

むさほりに帛ヒト着キてありく世ヨの中ナカは

越人

旦藁

荷兮

冬文

荷兮

冬文

野水

荷兮

野水

越人

冬文

越人

冬文

筵二枚もひろき我「カ」菴「イ止」
朝毎の露あはれさに麥作ル

越人
且藁

「ツユガ見ステラレヌユヘニト云コト」

碁「ツ」うちを送るきぬ「ツ」の月「イ」

野水
「(ウ九)」

風のなき秋の日舟に網「モ」入「リ」よ「コ」

荷兮

鳥羽の湊のおどり笑ひに「彌ナリ 秋季」

冬文

「トバ志摩ノ國」

あ「天分ト五平ナリ」ら「マ」ま「シ」しの「カ」ご「コ」ね「ネ」筑「ツ」廣「ク」も「モ」見「ミ」て「テ」過「ク」ぬ「ヌ」

野水

「近江淺井郡筑廣ノ神社 一夜男女打混シテ臥夫

婦ノ約ヲナス コレヲサコネト云 又此神社ノ祭

祀ニ 女ノ逢ヒ見シ男ノカスホト鍋ヲカツキテ

神前ヲ過ル 四月ナリ 又ナヘマツリトモ云」

つら「ツ」一期「キ」簪「シ」の名「ナ」も「モ」なし「シ」

荷兮

我春の若水汲に昼起て

越人

「簪ノ名モナシト云ルヨリ 隠者ナト、見ツケテ

氣尽ナルサマヲツケタリ 三思シテ味ヘシ」

餅を喰つ、いはふ君か代

且藁

山は花所のこらす遊ぶ日に

冬文

くもらずてらず雲雀鳴也

荷兮
「(オ十一)」

(白紙)

「(ウ十一)」

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあぶなき唄「ウ」のくづれ哉

越人

「ケシキノミニテ挨拶ヲスマセリ コノ例モアリト

シルヘシ」

蝶水「下りる」のみに「下」お「下」る「下」、岩「地」は「地」し「地」

舟泉

きさらぎや餅酒「サウ」すへき雪ありて

聴雪「ヤウセツ」

行幸のために洗ふ土器「ミユキ」

蝻髭「トウシ」

「天子ヲ行幸ト云 仙洞ヲ御幸ト云 古風ノ句也

行幸ト云ニ 郷士富農ナトノサマノ事モカネヨク

ツクレリ」

朔日を鷹もつ鍛冶のいかめしく

荷兮

月「照」なき空の門「ト」はやくあけ「明」

執筆
「(オ十二)」

(白紙)

「(ウ十二)」

春

昌陸「シヤウリク」の松とハ尽ぬ御代の春

利重「トシシゲ」

「往古連哥師ノ名也 松ヲ目出タク句ニツクラレタ

ルナリ 其句不為闇記」

元日の木の間の競馬足ゆるし「ケイマ」

重五

「タ、シツカニ元日メキタル事ヲ云シ也」

初春の遠里牛のなき日哉

昌圭

けさの春海はほどあり麥の原

雨桐

「住ルアタリノケシキナルヘシ」

門は松芍薬園の雪さむし

舟泉

鯉の音水ほの聞く梅白し

羽笠

舟「フネ」の「ノ」小松に雪の残けり

且藁

「舟中ニモ松カザリヲスル事也」

曙「アケトヨム」の人顔牡丹霞にひらさけり

杜國「トクニク」

「アケル夜二人顔ノカスミワタルケシキ 牡丹ノコ

「(オ十二)」

「(ウ十二)」

トキト云事也」

腰てらす元日里の睡りかな

星はらくかすまぬ先〔西〕の四方の色

けふとても小松負ふらん牛の夢〔イ〕

朝日二分柳の動く匂ひかな

先明て野の末ひくき霞哉

芹摘とてこけて酒なき瓢哉

のかれたる人の許へ行とて

〔※原本「許」「行」の欠損を朱で補筆。〕

みかへれば白壁いやし夕かすみ

〔隠者ヲ崇タル也〕

古池や蛙飛こむ水のをと

傘張の睡り胡蝶のやどり哉

山や花牆根〔カキ〕の酒はやし

花にうつもれて夢より直に死んかな

春野吟

足跡に桜を曲る庵二つ

〔マカリテユケハト ツケテキクヘシ〕

麓寺かくれぬものはさくらかな

榎木まで桜の遅きながめかな

饑別

藤の花たゝうつふいて別哉

山畑の茶つミをかさす夕日かな

蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春のくれ

夏

ほと、きすその山鳥の尾ハ長し

〔啼ヌユヘ夜ノ長キヤウニ覚ユルト云事也〕

郭公さゆのミ焼てぬる夜哉

かつこ〔閑居馬〕鳥板屋の背戸の一里塚

うれしさは葉かくれ梅の一つ哉

若竹のうらふみたる、雀かな〔裏〕

傘をた、まで蛩みる夜哉

武蔵坊をとふらふ

すゞかけやしてゆく空の衣川

逢坂の夜は笠みゆるほとに明て

馬かへておくれたりけり夏の月

老聃〔老〕曰〔言〕知〔三〕足〔二〕之足〔一〕常足〔ル〕

〔老子ノ事也〕

夕かほに雑水あつき藁屋哉

箒木の微雨〔ミサメ〕こほれて鳴蚊哉

ははき木はなかむる中に昏にけり

〔※原本「昏」に「昏」のみ朱で補筆。〕

萱草ハ随分暑き花の色〔カキクサ〕

蓮池のふかさわする、浮葉かな

暁の夏陰茶屋の遅きかな

夏川の音に宿かる木曾路哉

譬喩品ノ三界無安猶如火宅といへる心を
六月の汗ぬくひ居る臺〔ツタテ〕かな

秋

秋

背戸の畑なすひ黄はみてきりくす

九白〔ウ十三〕

李風〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

杜國〔ウ十三〕

龜洞〔ウ十三〕

舟泉〔ウ十三〕

商露〔ウ十三〕

聽雪〔ウ十三〕

柳雨〔ウ十三〕

塵交〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

柳雨〔ウ十三〕

塵交〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

柳雨〔ウ十三〕

塵交〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

全〔ウ十三〕

昌圭〔ウ十三〕

重五〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

越人〔ウ十三〕

旦藁〔ウ十三〕

貧家の玉祭

玉まつり柱にむかふ夕かな

尸きゝてまた一寐入する夜かな

雲折く人をやすむる月見哉

山寺に米つくほどの月夜哉

瓦ふく家も面白や秋の月

八嶋をかける屏風の繪をみて

具足着た顔のミ多し月見舟

待恋

こぬ殿を唐黍高し見おろさん

〔来又男ト云コトナリ〕

閑居増恋

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな

朝兒はすゑ一りに成にけり

冬

馬はぬれ牛は夕日の村しくれ

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申

〔挨拶ノ句 手本トスヘシ〕

雪のはら薺の子の薄かな

〔薺ノ覆ヘル下ナトニアリテ雪ヲシノグルナルヘシ〕

馬をさへながむる雪のあした哉

行燈の煤けぞ寒き雪のくれ

芭蕉翁をおくりてかへる時

この比の水ふみわる名残かな

隠士にかりなる室をもうけて

越人 〔(十五)〕

雨桐

芭蕉

越人

野水

全

荷兮 〔(十五)ウ〕

荷兮

舟泉

杜國

大垣住 如行

昌碧 〔(十六)終オ〕

芭蕉

越人

杜國

あたらしき茶袋ひとつ冬籠

貞享三丙子年仲秋下流

荷兮

〔(十六)終ウ〕

〔翻刻・「冬の日」〕

笠は長途の雨にほころひ 昏衣ハとまりく農あ

らしにもめたり 侘つくしたるわ「び」人 我さ

へあはれにおほえける むかし狂哥の才士 此國

にたとりし事を不図おもひ「(ウ)」 出帝申侍る

〔途〕ミチト云字ナリ 長途長旅ト云事ナリ

〔ワヒツクシタル イカニモアサマシゲルナリ〕

〔往昔 竹齊ト云ル狂哥士アリ〕

狂句こからしの身は竹斎に似たる哉

芭蕉

〔又狂句ノ文字ヲ除テモヨムヘシ 凧ニ吹レテアサ

マシケナル身ノ ムカシ竹斎ノコ、ヘキタモコン

ナ形リテアラウト 自感セシ句ナリ

〔「(道)」「(飛走)」「(笠)ソフタルサ、ソクハノスシハト人テキタヘシ」

たそやとバしるかさの山茶花

有明の主水に酒屋つくらせて

〔※原本「せ」の欠損を朱で補筆。〕

〔有明ハイヒカケテ月ヲ持セタルナリ 主水ハ水ヲ

ツカサトト官 タ、サケウルトコロヲコシラヘサ

セルト云也

かしらの露をふるふあかむま馬

〔其場ノ模様ナリ〕 朝鮮のほそり「ず」、きのにほひなき

重五

杜國

日のちりくくに野に米を茹る 正平 〔一三〕

わ「が」いはは鷺にや「ど」かすあたりにて 野水

髪はやすまをしの「ぶ」身のほ「ど」 芭蕉

「我庵トイヘルヨリ サラニモトメタルト見テ 出

家ナトノ 世ニモトリテ氣尽ナルサマニツケタリ」 重五

いつはりのつらしと乳をし「ぼ」りすて 重五

「又轉シテ 尼ト見ツケ 相約シタル男ナトノ心カ

ハリタルヲモムキニウツス」 荷兮

きえぬぞとハにす「こ」くなく 荷兮

「又轉シテ 夫ニテモモシタルニトリナス」 芭蕉

影法カゲボウのあかつきさむく火を焼て 杜國

あるしはひんにたえし虚家カライケ 杜國

「虚家 明家ノ事也」 荷兮

田中なるこまんか柳落るころ 荷兮

「コマンガ柳ハ伊勢ノ國ニアリ ムカシ小方ト云ル

女 男ノ心タカヒタルヲウラミテ ソノ辺ノ池ニ

身ヲ投テ死ス ソノ骸ヲ埋シアトニ柳ヲ植ル 今

ニ小方柳ト云」 野水 〔一三〕

霧にふね引人ハちん「ば」か 野水

たそ「が」れを横にな「が」むる月ほそし 杜國

となりさ「が」しき町に下り居る 重五

「上達部殿上人ナトノ ヨシアリテ シハラク町住

居アリシサマナリ」 野水

二の尼に近衛の花のさかりきく 野水

「二ノ尼ハ后妃ノ母 房ニニアリ 夫レカニニナ

リタルヲ云 近衛ハ左近衛ノサクランハナナリ」 芭蕉

「ヒトツケシキヲヌイシテ 侘タルサマ也 手ダレ

ノ場ナリ」 重五

のり物に簾透スクレスズ顔おほるなる 荷兮

いま「ぞ」恨の矢をはなつ声 芭蕉

「前句ヲ引立タル附ヤウナリ」 芭蕉

ぬす 人の記念オケタメの松の吹おれて 芭蕉

「ヌス人ノ記念ノ松ハ 熊坂長範物見ノ松ト云ル松

美濃ノ國ニアリ」 杜國 〔一三〕

しはし宗祇の名を付し水 杜國

「宗祇ノ名ヲツケシ水モ同所ニアリ 東野州公コレ

マテ宗祇ヲ送り給ヒテ古今傳授アリ 宗祇ノ哥ア

リ 不為闇記」 荷兮

笠ぬきて無理にもぬる、北時雨 荷兮

冬かれわけてひとり唐トウチヤ「」萱 野水

しらくくと碎クツクツけしは人の骨か何 杜國

烏賊イカはゑひすの國ウラナヒのうらかた 重五

(※ルビ「占ノ事」の「占」にさらに「ウラナヒ」とルビ。) 重五

「ト噬家ニ龜ノ甲ヲ炮テ吉凶ヲ曉す コレテツイテ

戎ノ國ニテハイカノ甲ニテモヤクヘシト云カケタ

ルナリ」 野水

あはれさの謎ナゾにもとけし郭公 野水

秋水シウスイ一斗もりつくす夜そ 芭蕉

「漏刻トテ 水ニテ時計ヲシカケテ 水ヲ入テ時ヲ

シルナリ」 重五

日アノ東ノの李白カ坊に月を見て 重五

中に木槿ハナフクレナリをはさむ琵琶打 荷兮 〔一三〕

うしの跡とふらふ草の夕くれに

芭蕉

箕「アサ」に鮫「シロ」の魚をいたゝき

杜国

わかいのりあけかたの星「ハラム」孕むへく

荷兮

「モノアラク行ニテモ修スル躰」

野水

けふはいもとのまゆかきにゆき

野水

「カキニユクハワルト云事ニテ古言ナリ」

杜国

綾「アヤ」ひとへ居湯「アリユ」に志賀の花漉「スキ」て

杜国

「居湯高貴ノ人ノ浴風呂ナリ アヤノキヌヲツカヒ

テ夫ニ風呂ノ水ヲ花トモ汲コシタレハ アヤノキ

ヌニテスクヤウニナルト云事ナリ」

重五

廊下「ウラ」は藤のかけつたふ也

重五

「白紙」

重五

「白紙」

「(ウ)四」

おもへとも壮年いまたころもを振ハす

菴水

はつ雪のことしも袴「ハカマ」きてかへる

菴水

「イマダ若クサカンニシテ ウルサキ世ノ中ニ交ル

ヲウキコトニ思ヘトモ イマタ世ヲノカレス

グヅ「グ」くシテキル ト云意」

杜国

霜にまた見る薺「ナズ」の「飯」

杜国

「※「飯」は原本「食」。旁の「反」を朱で書き足す。」

杜国

「シモノフル時 秋薺「アキナツ」ナトノカケニテ 朝早ク飯ナ

トクヒシ事ヲ思ヒ出シテ コ、ロハ月日ノ早タタ

ツヲカナシメリ」

芭蕉

野菊「ノキク」までた「づ」ぬる蝶「テフ」の羽おれて

芭蕉

「第三躰ノ龜鑑」

荷兮

うつらふけれとくるま「マ」ひきけり

荷兮

「フケレハ啼ト云事ニテ ウツラモコノヤウテナケ

トテ糸車「イトクルマ」ヲツムクナリ」

麻呂「マロ」か月袖「ツキスode」に鞆「タヌ」をならすらん

重五

「麿「マロ」トハ我ト云事ナリ 上達「ウダツ」部殿上人「ベツイン」ナト云事」

重五

桃花「トウカ」をたをる貞徳「サダトク」の富「トモ」」

正平

「貞徳 柿園「カキノ園」ニ並ヒテ桃園「モモノ園」ヲツクル

正平

雨「アメ」こゆる浅香「アサカ」の田螺「タナゴ」ほり植「ウエ」へて

杜国

「田螺「タナゴ」ヲ堀ウヘテハウツシウツムコトナリ

杜国

浅香「アサカ」沼 奥州「ウチノミチ」也 田「タ」ニシノ名所」

野水

奥「ウチ」のきさらきを「サ」只「ただ」なき「なく」になく

野水

「スグニ奥州「ウチノミチ」トツケタリ 奥トハ奥州「ウチノミチ」ノコト」

荷兮

床「トコ」ふけて語「カタリ」れはいとこなる男

荷兮

「男女「オノメカミ」深閨「フカニニテハシメテウチトケテカタリテミレバ

イトコニテアリシトナリ」

縁「ヰ」さまた「げ」の恨「ウラ」ミのこりし

はせを

「夫「ウツ」コヘ縁「ヰ」サマタゲハ今マテソレトハシラズ 誰「タレ」ガ

誰ガ

タメニヘダテラレシトナリ」

野水

「口「クチ」おしと瘤「ウツ」をち「ぎ」るち「カ」からなき

野水

「瘤「ウツ」ハ谷「ヤニ云コブ「クボ」ノコトナリ」

重五

明日「アス」はかたきにく「ク」び送「オウ」りせん

重五

「小三「コサン」 太「タに杯「サカベとらせひとつうたひ

芭蕉

「小三「コサン」太「タトハノリアヒノヨキ名「ナヲ設「セケタルナリ」

杜国

月は遅「オソかれ牡丹「タンぬす「ヌ人

重五

繩「イトあみのか「ぎ」りハやぶれ壁「カ落「オて

荷兮

こつ「クくとのみ地蔵「ジ切町「キ」

杜国

初「ハツはなの世「ヨとや嫁「ユメのいかめしく

杜国

「初「ハツはなの世「ヨとや嫁「ユメのいかめしく

杜国

「初「ハツはなの世「ヨとや嫁「ユメのいかめしく

杜国

〔×〕初花ノ世トテヤ嫁入ノト入テキクヘシ
かぶろいぐらの春そかハゆき

野水

〔◇〕忝 小女

柳「ば」こに餅すゆるねやほのかなる

かけい

〔▽〕コノ句 春季節ウスキ方ナレハ 鶯トツケテテ季
ヲタシカニス

うくひす起よ昏燭とほし帝
篠ふかく梢は柿の蒂さひし

芭蕉

三絃からん不破のせき人
道す「が」ら美濃「で」打ける碁を忘る

重五 〔一〕(オ六)

〔不破二直ニ美濃トツケタリ〕
ねさめくのさても七十

杜國

〔ワスル、ト云ヨリ 七十トキハメタリ〕
奉加めす御堂に金うちになひ

重五

ひとつの傘の下挙りさす

荷兮

〔ゴゾリハ アツマリヲシアフテサス事〕

蓮池に鷺の子遊「ぶ」夕ま暮

杜國

まどに手つから薄様をすき

野水

〔自ら薄ヤウノ紙ヲスクコト〕

月にたてる唐輪の髪〔アカカゲレ〕の赤枯て

荷兮

〔唐輪ノ髪ハ俗ニ見ワゲト云ナリ ソノカミノ赤ク
枯タルヲ見て 常人ナラザル事ヲシルヘシ〕

恣せぬきぬた臨濟をまつ

はせを 〔一〕(ウ六)

〔臨濟ハ禪宗ノ大善智識ナリ 前句ヲ異人ト見テ
カクハツケタリ〕

秋蟬の虚〔カラメケガラナリ〕に声きくしつかさハ

野水

〔引ツ、キテ悟道ノサマヲツケタリ〕

藤の實つたふ雪ほつちり

重五

袂〔タモト〕より硯〔イシ〕をひらき山〔ヤマ〕か「げ」に

芭蕉

ひとり〔一人〕は典侍〔スケ〕の局〔イマ〕か内侍〔ウヂノ〕か

杜國

〔典侍ハ天子ノ傍近ク召仕レ 第一ニ事ヲトル官女
ヲ云〕

三ケの花鸚鵡〔アナム〕尾〔ビレ〕な「が」の鳥〔トリ〕いぐさ

重五

〔三月三日 内裏ニ闘鶏トテ ニハトリヲケアハサ
スコトナリ 夫ニヨリテ アフムヲナガナドノ鳥
ドモニモ軍ヲサセントノ句ナリ〕

しらか〔白髪〕みいさむ越〔ワタ〕の獨活〔ツクシ〕菖〔アサギ〕

荷兮 〔一〕(ウ七)

〔白紙〕

つえ〔杖〕をひく事〔ワツカニ〕 僅〔オノ〕に十歩〔十歩ト云事〕

つつみかねて月〔ツキ〕とり落す霽〔ハレ〕かな

杜國

こほり〔水〕ふみ行水〔ミナト〕のいなつま

重五

齒〔シタ〕朶〔ト〕の葉〔エダ〕を初狩〔ハジメカゲル〕 人〔ヒト〕の矢〔ヤ〕に負〔マケル〕て

野水

〔シダハ山草トテ俗ニウラニ白ト云草ナリ 正月用
ユ〕

北の御門〔ミカドノカド〕をおしあけのはる

芭蕉

〔四句メ ヲトナシク シカモケダカク ヨクツク
レリ〕

馬糞〔バフン〕搔〔カク〕あふ〔敷〕きに風〔カゼ〕の打〔ウチ〕かすみ

荷兮

〔馬糞カクアフチ風モ霞頃ト云意〕

茶〔チヤ〕の湯〔ユウ〕者〔モノ〕おしむ野〔ノ〕への蒲公英〔アキノヒコ〕

正平 〔一〕(オ八)

らうた「げ」に物よむ娘かし「づ」きて 重五

「ラウツケ」若キ女ナト イタノシケニ モノニタヘ

カネタル嬌艶ノテイ」

燈籠ふたつになさけくらふる

「スクニ情ニテセメタル句ナリ」

つゆ萩のすまふ力を撰「バ」れす

「萩アハセナリ 夫ヲスマフト云ルナリ カヲ撰ハ

スト句ニナス」

蕎麥さへ青し滋賀樂の坊

「滋賀樂ハ近江國信樂郡 聖武帝皇居ノアトアリ」

朝月夜双六うちの旅ねして

紅「」花買みちにほと、ときすきく

「赤」紅花ヲ旅アルキシテ買出スナリ」

しのふまのわさとして雛を作り居る

命婦の君より米なん「ど」こす

「命婦」命婦ハ天子ノ御末ヲツトムル官女ナリ」

ま「が」きま「で」津浪の水にく「づ」れ行

佛喰たる魚解きけり

「ツナミト云ルヨリ大魚ノアルヘキサマヲツケタリ」

縣ふるはな見次郎と仰「が」れて

「アガタフルトハ 在所ニ古ク居ルト云ルコトナリ

又日向國何某次郎トカイヘル人 余リニ花ヲ愛ス

コレニヨツテ 人ミナ名ハヨハデ タミ花見次郎

ト呼ルトゾ」

五形董の畠六反

うれしけに囀る雲雀ちり／＼と

真昼の馬のねふたかほ也

おかさきや矢矧の橋のな「が」きかな 杜國

「岡崎」岡崎矢矧橋ハ三河ノ國ニアリ 哉留 フキナガシ

ノカナ、リ ヤトラクハ 冠辞ノヤウニツクレハ

ナリ」

庄屋のまつをよみて送りぬ

「庄屋ノ松ヲヨミラクハ イカニモサヒシクハカ

ナキサマナリ」

捨し子は柴荊長にの「び」つらん

「夫ニヨツテ次ニ捨シ子トツケシナリ」

晦日をさむく刀賣る年

雪の狂呉の國の笠め「づ」らしき

「笠重呉天雪トイヘル古語ニヨツテ 風狂ノサマヲ

云ルナリ」

襟に高雄が片袖をとく

「襟 エリマキヤウノモノ 又巾ニテモヨシ 高雄

ハ往昔ノ傾城遊女ナリ」

あた人と樽を楢に吞ほさん

芥子のひとへに名をこ「ぼ」す禪

三ヶ月の東は暗く鐘の聲

秋湖かすかに琴かへす者

「秋ノ湖ヲハルカニ遠ニシテ 琴ヲウチカヘシヒク

モノハ誰ナルラント ウタカヒタルナリ」

烹る事をゆるしてはせを放ける

「烹 俗ニ魚ヲニル也」

聲よき念佛數をへ「だ」つる

かけうすき行燈けしに起佐て

おもひかねつも夜るの帯引

「こかれ飛たましゐ花のか「げ」に入 荷兮

「前句 恋ノ句ヲ ウハバハコヒヲアシラヒテ 真

意コヒニアラス 花ニ身ヲモ捨カネマジキ人ノ句

ニツクレリ」

その望の日を我もおなしく はせを

「西行上人哥 ねかはくハ花のもとにて我死んその

きさらきの望月のころ とヨミテ 二月十五日死

セリ コレニヨツテ コガレル魂ト花ヲメデシヨ

リ我モ西行ノ如ク 其如月ノ望の曰ニ死タイト云

句ナリ コレニテ芭蕉ノ風雅骨髓ヲシルヘシ」

〔白紙〕

なに波津にあし火焼家はす、けたれと

炭賣のののかつまこそ黒からめ 重五

「万葉集 奈尔波頭仁若火焚屋盤須々氣多礼泥已質

妻已曾戸古妻豆羅奈理 世の中の女ハミなうるハ

しき 炭うりのおのがつまこそハ黒からめ しか

るを世上の女ミな見みくきやうに炭うりハ思ふて

居る歎といへる句也」

ひとの粧ひを鏡磨寒 荷兮

「その如く ミなうるハしき世上の人の粧ひのため

に か、ミとく身もあるに 世ハつれなきものか

など嘆息の躰なり」

△花棘馬骨の霜に咲かへり 杜國

「△花棘ニ馬骨と云草の霜に又帰り咲せしと云句也

一躰句のとりあはせにて第三になれり 深意解す

へからす 咲降りてと入てきくへし」

鶴見るまとの月かすかなり 野水

かせ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日 芭蕉

○萩織るかさを市に振する 羽笠

「○萩をるかさは 萩をわりて組たる笠也 出羽國

に製す」

▽賀茂川や胡磨千代祭り徽近ミ「し」 荷兮

（※原本の「ミ」を、朱筆で「し」と直す。）

「▽胡磨千代ハ 都上加茂の辺に稻荷の神社有 此

神甚ごまを好せ給ふ 故にこまを供してこれを祭

る」

いはくらの智なつかしのころ 重五

おもふこと布搗哥にわらハれて 野水

うきははたちを越る三平 杜國

捨られてくねるか鴛の離れ鳥 羽笠

火をかぬ火燵なき人を見む 芭蕉

門守の翁に昏子かりて寝る 重五

血刀かくす月の暗きに 荷兮

（※原本「刀か」のカスレを朱で補筆。）

霧下りて本郷の鐘七つきく 杜國

「武陽なり 喧嘩のものなどよく通る、所」

ふゆまつ納豆た、くなる「べ」し 野水

はなに泣桜の徽とすてにける 芭蕉

「花に感してハ泪をもそ、ぐを いやこれさへこの

さくらのかびになるであらふと 思ひ捨たる句なり」

僧ものいはす款冬を吞 羽笠

「山吹にハあらず 茶の名なり」

白燕濁らぬ水に羽を洗ひ

〔聖代白燕遊〕

言旨かしくく釵を鑄る

〔センジ 天子より臣下へ給る勅書を云〕

八十年を三つ見る童母もちて

〔八十年も三つ見ぬとハ 八十三歳になりたるもの、

ことなり〕

なかだちそむる七夕のつま

〔なかだちハ媒にハあらず 中絶なり〕

西南に桂のはなのつ〔ぼ〕むとき

〔月のことをかくハひねりていひ出せるなり〕

蘭のあ〔ぶ〕らにト木うつ音

〔ト木油などびるなり〕

賤の家に賢なる女見てかへる

釣瓶に粟をあらふ日のくれ

はやり来て撫子かさる正月に

〔此頃の風調流行のこともあるへし〕

つゞみ手向る弁慶の宮

寅の日の旦を鍛冶の急起て

雲かうハしき南京の地

〔※原本振仮名「ツチ」のカスレを朱で補筆。〕

〔南京ハ兵荊州の間にあたる〕

い〔が〕きして誰ともしらぬ人の像

〔いがきしてハ あらけツリせし事也〕

泥にこころのきよき芹の根

粥すゝるあかつき花にかしこまり

〔狩衣の下に鎧ふ春風〕

荷兮

重五

野水

杜國

羽笠

芭蕉

重五

荷兮

杜國

野水

芭蕉

羽笠

荷兮

重五

やすい

芭蕉

〔北のかたなくく簾おしやりて

〔三句之間之事 平家物語 中将惟盛重衡ナドヲ

源氏ノ武士ドモトラヘテユクサマナリ 夫ヲ北ノ

方公達ナド ナグリヲラシム躰ナリ〕

〔※「粥」「狩」「北」の左肩に△を付して「三句」を示している。〕

ねられぬ夢を責るむら雨

〔此一巻 恋にて揚たり ナコリノオモテ コヒナ

ケレハナリ〕

〔白紙〕

〔ウ十三〕

田家眺望

霜月や鶴のイタなら〔び〕あて

〔眺望のさまよくと、のひたり〕

冬の朝日のあはれなりけり

〔此わきよく味へし 類ひなきものなり〕

〔カシヒヤキ 檜檜山家の体を木の葉降

〔此第三 木の葉ふりてと云を 畧したるものなり

故にふりとよむへし〕

ひきずるうしの塩こほれつ、

音もなき具足に月のうすくと

酌とる童蘭切について

〔酒の酌に立たるなり〕

秋のころ旅の御連歌いとかりに

〔いとかりそめにと入てきくへし〕

漸くはれ帝富士ミゆる寺

〔二句の間禪家などのさま也〕

羽笠

重五

野水

杜國

羽笠

芭蕉

荷兮

芭蕉

重五

杜國

羽笠

埜水

芭蕉

荷兮

荷兮

寂として椿の花の落る音
茶に糸遊をそむる風の香

杜國 重五

「糸を茶に染と云事をかくいひて春季を続ける也」
雉追に烏帽子の女五三十

野水

「行宮離宮などのさまなり」
庭に木曾作るこひの薄衣

羽笠

「高貴の後園准てしるへし」
なつふかき山橋にさくら見ん

荷兮

「これも前の大意なり」
麻かりといふ哥の集あむ

芭蕉

「こゝにて一轉して隱者などのさま出たり」
江を近く獨楽菴と世を捨て

重五

「前句をか、く」
我月出よ身はおほなる

杜國

たひ衣笛に落花を打拂
籠輿ゆるす木瓜の山あい

野水

「此三句 菘情より捕人の姿に轉す」
骨を見て坐に涙くミうちかへり

芭蕉

「そゝろハ しつかにたんくなどの意也」
乞食の簞をもらふしのゝめ

荷兮

泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て
御幸に進む水のみくすり

重五

「一句ハ 御幸などなれハ葉を奉りたるなり」
ことにてる年の小角豆の花もろし

野水

萱屋まはらに炭団つく白
「萱屋 葛屋におなし 古へハ両様によひて違へり」

羽笠

芥子あまの小坊交りに打むれて

荷兮

「けしあまハ すこし髪を置たる女子なり」
おる、はすのみたてる蓮の實

芭蕉

「卷中一変の轉」
しつかさに飯臺のそく月の前

重五

露をくきつね風やかなしき
（※「かなしき」に付された注記の「アラト」はママ。）
釣柿に屋根ふかれたる片庇

杜國

「片方はかりある家の事なり」
豆腐つくりて母の喪に入

羽笠

「父母喪 古ハ三年」
元政の草の袂も破ぬへし

野水

「元政ハ隱者 山城國深草に住す 扶桑隱逸傳を撰ふ 父母に至孝なり 元彦根藩石井俊平 故ありて致仕す」
伏見木幡の鐘はなをうつ

芭蕉

いろふかき男猫ひとつを捨かねて
春のしらすの雪はきをよふ
水干を秀句の聖わかやかに

杜國

「水干ハ 薄衣にてつくりたる直衣のこと きものなり 冬の日俳諧五卷 これにて終わる故に 狂句木からしの身の竹斎に似たるとある翁の句によりて 秀句の聖若やかにと祝したるなるへし」
山茶花匂ふ笠のこからし

重五

「山茶花匂ふ笠のこからしも 初卷の脇發句にすかりて一卷の終りをなすもの歟 祝物三思すへし 聖とハ物にたけたる人 又僧などををも云」

野水

うりつ

「終十六」

二三

追加

いかに見よと難面うしをうつ霰ツレガヒ「キ」

樽火にあふるかれはらの松「木」

とくさ菊「カキ」下着に髪をちやせんして

(※原本「髪」のカスレを朱で補筆。)

〔俗にいふ茶せん髪なり〕

檜笠に宮をやつす朝露

〔宮ハ親王となり〕

銀に蛤かはん月は海「コカヒ」

ひたりに橋をすかず岐阜山「キズ」

〔岐阜 みの、国〕

羽笠

荷兮

重五

杜國

芭蕉

野水

〔(終十六)〕

〔河江湖ノ東南ヲスヘテ江南ト云〕

(※原本「江南」の右脇に書き込む。)

(※原本「レ」の欠損を朱で補筆。)

〔酒ノルイナリ〕

(※原本「水漿」の上方に書き込む。)

〔書行也 息〕

(※原本「恵子」の「恵」を見せ消子にして書き込む。)

〔草紙ニオナシ〕

(※原本「藻思」の上方に書き込む。)

〔天地ト云事ナリ〕

〔(二)〕

花見

木のもとに汁も鱈も桜かな「ナマス」

〔山笠遊宴ノ躰〕

西日のとかによき天気なり

〔スヘテワキハヨク發句ニ打ソフヲヨシトス此句ヲ

見ルヘシ タトヘハ君ノ臣夫ノ妻ノコトナルモノナ

リ〕

旅人の風かき行春暮て「シラキ」

はきも習はぬ太刀の鞘「ヒキナタ」

〔鞘ハ獣皮ニテツクル雨中用意ナリ 又伊達ニモツ

クル 往古武者画ノ太刀ナトニ虎ノ皮熊ノ皮ニテツ

クルシリザヤト云〕

×月待て假の内裏の司召「カリ」

〔×カリノ内裏ハ須磨笠置ナトシハラク皇居ノアリ

シヲ云 司召ハ國守ノ已下司勤多キモツニ春秋ノ

ウチ一度ツ、天子ヨリ召出サレ除目オコナハレ祿官

〔翻刻・ひさし〕

江南の珠碩我にひさこを送り これハ是水漿をも「チンセキ」

り酒をたしなむ器にもあらず 或は大樽に造りて江

湖をわたれといへるふくへにも異なり 吾また後の

恵子にして 用ることをしらす つらくそのほと

りに睡り あやまりて此うち「アキ」に陥る 醒て「サト」ミル

に 日月陽秋「春ト云事ナリ」さら、かにして 雪のあけ「ユキ」〔オ〕ほ

の闇の郭公もかけたることなく なを吾「ワ」 知人と

も見えきたりて 皆風雅の藻思「サカシ」をいへり しらす

是ハいつれのところにして乾坤の外なることを 出

てそのことを云て毎日此内にとり入

元禄三六月

越智越人「アチ」

位等ヲ給フ事ナリ 春アルヲ縣召ト云

粉「モミウス」白「造」つくる「ワマ」袖「キコリノ事也」がはやわさ

鞍「オケ」置「イ」る三歳駒「イ」に秋「イ」の来て

名はさま「イ」く「イ」に降替「イ」る雨

入込「スハ」に諏訪「ワキ」の涌湯「ワキ」の夕「イ」ま暮

「諏訪信州ニ有湯泉ナリ」

中「音」にもせ「音」いの高き山伏

いふ事を唯一方「イ」え落しけり

ほそき筋「イ」より恋「イ」つ「イ」のりつ、

「△細キスチヨリハ 始ハイトカスカナルオモヒヨ

リ 後ニハタン、手ツヨク大膽ニナリ 人口モ

人目モカマハヌヤウニナルト云事ナリ」

物おもふ身「イ」にももの喰「イ」へとせつかれて

月見る顔「イ」の袖「イ」おもき露

秋風の船「イ」をこはかる波「イ」の音

雁「イ」ゆくかたや白子若松

○白子若松トモ伊勢ノ國ニ有ナリ」

千部「イ」讀「イ」花「イ」の盛「イ」の「イ」身「イ」田「イ」

「イセノ國ニ有村名也」

巡礼「イ」死ぬる道「イ」のかげろふ

何「イ」よりも蝶「イ」の現「イ」そあはれなる

文書「イ」ほと「イ」の力「イ」さへなき

羅「イ」に日「イ」をいと「イ」はる、御「イ」かたち

「羅カタヒラノルイナリ」

熊野「イ」みたきと泣給「イ」ひけり

「廻國巡禮ナト思ヒツキシ述懐ノサマナリ」

手束「イ」弓「イ」紀「イ」の関守「イ」が頑「イ」に

「キウキウノ國ノ事也」

「紀ト云ンタメニ手束弓トハイヒカケタリ」

酒「元」では「げ」たるあたま成覽

双六「イ」の目「イ」を「イ」のそく「イ」まで暮「イ」か、り

假「イ」の持「イ」仏「イ」にむかふ念「イ」仏

中「イ」く「イ」に土間「イ」に居「イ」れハ蚤「イ」もなし

「斗撒肺行ノサマナリ」

我名「イ」は里「イ」のな「イ」ふり「イ」もの也

憎「イ」れて「イ」いらぬ躍「イ」の肝「イ」を煎「イ」

「肝煎ハ世話ヲヤクコトナリ」

月夜「イ」く「イ」に明渡「イ」る月

花「イ」薄「イ」あまり「イ」まね「イ」けはう「イ」ら枯「イ」て

唯「イ」四方「イ」なる草庵「イ」の露

「隠栖ノ句 唯ト云字ヲヨクキクヘシ」

一貫「イ」の錢「イ」む「イ」つかし「イ」と返「イ」しけり

医者「イ」のく「イ」すりハ飲「イ」ぬ「イ」分別

花咲「イ」けは芳野「イ」あたりを欠廻「イ」

（※原本「は」の欠損を朱で補筆。）

蛇「イ」にさ「イ」る、春「イ」の山「イ」中

翁 十二

珠碩 十二

曲水 十二

いろくの名もむつかしや春の草

「春草紛々ノ躰」

うたれて蝶の夢はさめぬる

「ナトヤカに作レル 草躰」

翁

珠碩

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

蝙蝠コウモリののどかにつらをさし出て

〔長高躰ナリ〕

駕籠カゴのとをらぬ峠越たり

紫蘇シソの実をかますに入る、夕ま暮

〔農家ノ具〕

親子ならひて月に物くふ

秋の色宮ものそかせ給ひけり

〔宮 紳縞家ノ事ナリ〕

こそくられてハわらふおれきれき佛ラモカケ

うつり香の羽織を首にひきまきて

小六風うたひし市市より帰る事いふ也のかへるさ

〔其比ノ章謡ノ名ナルヘシ〕

鮎釣ハのちいさく見ゆる川の端

念佛申ておかむ端ミ端〔つ〕かき

〔瑞籬ハ神社ノ前ニアル垣ナリ〕

こしらえし薬もうれす年の暮

庄野、里の犬におとされ

〔伊勢國ノ驛ナリ〕

旅姿ラサナ稚き人のウハ廻つれて

花はあかいよ月ハ朧夜

〔一句ノ作 狂シテ眞意正風ノ大旨ヲウコカス 且

一轉ノ場ニシテカロシ〕

しほ汐のさす椽ノの下迄和日なり

〔春季ニシテ長閑ナリ〕

生鯛ナマあかる浦の春哉

此村の廣きに醫者のなかりけり

路通

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

そろはんをけハものしりといふ

かはらさる世を退屈アイクツもせずハに過

また泣出す酒のさめきハ

〔なかもやる秋の夕そ「だ」、ひろき

〔+ダミハ只ノ意ナリ〕

〔☆蕎麦真白に山の胸中

〔☆胸中ハ都テ半腹ノ事ナリ〕

うとんうつ里のはつれの月の影

〔x〕もつ子のミ裸むしな裸むし

〔裸虫 説文 三百余虫ノ冠タル裸虫 人間ノ事

トアリ コノ一句ノ作ハ 人ヲハタカムシト云ガ

ドウシテモムシラシキトコロハミヘヌガ 今コノ

スモ、持居ル子共等ヲミレハ イカサマミナハタ

カムシトモミエルト 不審ヲハラシタル句ナリ〕

〔めつらしやまゆ煮也と立とまり

〔蘭ハ カイコノイトノ 未タ糸ニナラサルサキ

ノ事ナリ〕

〔○文珠モシシの智恵も槃特シトクが愚癡アチ

〔○文珠槃特トモ大聖 釋迦ノ御弟子ニテ 一人ハ

至テ智恵アルモノ 一人ハスグレテ愚ナルモノナ

リ 一句都テ世ノアリサマヲ云タル句ナリ〕

なれ加減又とは出来ジハひしほ味噌

何ともせぬに落る釣棚

しハのふ夜のおかしうハなりて笑出ス

逢ふより顔を見ぬ別して

汗の香をかゝえて衣をとり残し

越

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

しきりに雨は「本ウチアケルコトフルナリ」
花さかり又百人の膳立に
春八旅ともおもはさる旅

同 兮 同

珎碩 九
翁 一

「(オ、セ、)

路通 八
荷兮 十

越人 八

「(ウ、セ、)

城下

鉄炮の遠音に曇る卯月哉

野徑

「初夏ノ暑情 寒暑思フマ、ナルノ姿 眼ニウカ
フガコトシ」

砂の小麦の瘦てはらく

里東

「アリアハセヨキワキナリ」

「[×]西風にますほの小貝拾ハせて

泥土

「[×]マスホノ小貝ハ タミ小貝トイフコトナリ マ

スホハ眞蘇枋 又万葉集ニハ十寸ニテマストヨマ

セタリ 貝ノソノイロニ似タレハイフ 十寸穂ノ

芒ナト穂ノ長キ事尺余ナルライフ」

なまぬる一つ鯛「モウ」ひかねたり

乙州

「[△]碁いさかひ二人しらける有明に

怒誰

「[△]イサカヒハ争ヒノ事ナリ」

「[○]秋の夜番の物もうの聲

珎碩

「(オ、ハ、)

「[○]夜番ハ宿直「トノキ」ノ事ナリ 殿中館ナトへ夜話ル事ヲ

云 物もうハモノ申ト云事ナリ 案内ノアリタル

ナリ」

女郎花心細気におもはれて

筆

「戀ナリ」

目の中「オ、ハ、」おもしろく見遣かちなる

野徑

「同断」

けふも又川原咄しをよく覚へ

里東

顔のおかしき生つき也

泥土

馬に召神主殿をうらやみて

乙州

一「ト」里「下」「軍アツマル事」そり山の下の薊

怒誰

「[△]見知られて岩屋に足も留られず

泥土

「[△]岩屋 洛北ニア 惟喬親王遊獵ノ地」

里東

「(ウ、ハ、)

「[○]雪舟「ワリ」に乗越の遊女の寒さうに

野徑

「[○]雪舟ハ北國雪フカキ國ニテ乗物ノカハリトス

地車ノ如キモノナリ 越又越路ト云 越前越中越

後コレヲニ越路ト云」

(※原本「雪舟画工ナリ」と一度朱書したものを抹消)

巻歩につなく丁百の錢

乙州

月に庄屋をよつて高「ぶ」らせ

珎碩

「木納ナルヲ嘲笑スルサマナリ」

煮しめの塩のからき早蕨「サワラヒ」

怒誰

くる春に付ても都わすられす

里東

半氣違の坊主泣出す

珎碩

「都ヲ志レ得ヌト云ニ 狂氣ノ僧ノ泣出シサマ

ハ仁和寺ノ何某ノ院ニ居タリシナドオモヒヤラル」

昔

のみに行居酒の荒の一蹠「サワキ」

乙州

古き「ば」くちの「残」こる鎌倉

野徑

「(オ、九、)

時くは百姓までも烏帽子にて

〔旧都ナトノサマナリ〕

配所を見廻ふ供御の蛤

怒誰 泥土

〔配所ハ高貴ノ人罪アリテ流サレタル處ナリ コレ

ハ供御トアレハ親王ナドニテオハスルナルヘシ〕

たぞかれハ船幽霊の泣やらん

連も力も皆座頭なり

から風の大岡寺繩手吹透し

〔大岡寺繩手ハ勢州関驛龜山驛ノ間ナリ〕

蟲のこはるに用叶へたき

糊剛き夜着にちいさき御座敷で

夕辺の月に菜食嗅出す

看経の嗽にまきる、咳気聲

四十は老のうつくしき際

髪くせに枕の跡を寐直して

酔を細めにあけて吹る、

杉村の花ハ若葉に雨氣つき

〔夏季ノ花ナリ〕

田の片隅に苗のとりさし

〔夏季ナリ〕

野徑 六

里東 六

泥土 六

乙州 六

怒誰 六

珍碩 五

筆 一

怒誰

泥土

コレ

玠碩

里東

野徑

乙州

泥土

怒誰

里東

玠碩

乙州

野徑

怒誰

泥土

〔オ、十〕

雑

龜の甲煮らる、時ハ鳴もせず

乙州

〔無法弁ノ句ニシテ教外別傳ノ例トモ云ツヘシ 先

ニモ云ル通り 噫家ニハ龜ノ甲ヲヤク ソレヲ烹

ルト一轉スリアケテツクリシナリ 龜ハ声アルモ

ノナレトモ 常ニハ鳴モスレトモ 流石優美ニ烹

ラル、時ハ鳴ヌト云事ナリ 意ハ人情反復ヲ憎ミ

タルノ句ナリ〕

唯牛糞に風のふく音

玠碩

〔ワキモ発句ノ意同断ナリ 人ハタ、カクノゴトク

ニ無益ニシテ ヨク静ナランコトアレト示ス句ナ

リ 一鉢発句分意ノ作ナリ〕

百姓の木綿仕まへハ冬のきて

小哥そろゆるからうすの繩

獨寐で奥の間ひろき旅の月

蟪蛄落てきゆる行燈

秋萩の御前にちかき坊主衆

風呂の加減のしつか成けり

鶯の寒き聲にて鳴出し

雪のやうなるかますこの塵

初花に雛の卷樽居ならへ

心のそこに恋そありける

御簾の香に吹そこなひし笛の役

〔奏楽ナドアル鉢ナリ〕

寐ことに起て聞ハ鳥啼

〔ウ、十〕

乙州

先

ソレヲ烹

龜ハ声アルモ

流石優美ニ烹

意ハ人情反復ヲ憎ミ

タルノ句ナリ〕

玠碩

人ハタ、カクノゴトク

ヨク静ナランコトアレト示ス句ナ

リ 一鉢発句分意ノ作ナリ〕

百姓の木綿仕まへハ冬のきて

小哥そろゆるからうすの繩

獨寐で奥の間ひろき旅の月

蟪蛄落てきゆる行燈

秋萩の御前にちかき坊主衆

風呂の加減のしつか成けり

鶯の寒き聲にて鳴出し

雪のやうなるかますこの塵

初花に雛の卷樽居ならへ

心のそこに恋そありける

御簾の香に吹そこなひし笛の役

〔奏楽ナドアル鉢ナリ〕

寐ことに起て聞ハ鳥啼

昌房

〔夢中現語ナリ〕

錢入〔キンチャク〕の中〔中〕着〔着〕下〔下〕て月〔月〕に行〔行〕

〔※「提」に、「サケテ」とルビ。〕

また上〔ウヘ〕京〔キョウ〕も見〔見〕ゆるや、さむ

〔歩行躰ヲ直ニツケタリ 一格ナリトシルヘシ〕

蓋〔カガ〕に盛鳥羽の町屋の今年米

〔○蓋ハ椀五器ノルイノ覆ヒナリ 蓋ナリ〕

雀〔スズメ〕を荷〔カ〕ふ籠〔籠〕のぢ、めき

〔×チ、メキハ ムレイアイ疇ノ貌〕

うす曇る日ハとんみりと霜おれて

鉢〔ハチ〕いひならふ声の出かぬる

染〔シメ〕て憂木綿裕〔裕〕のねすミ色

〔△戀ノ句ニテ 抱ヘラル、ナトニ 撰リアマサレ〕

シサマナリ

暗〔クラ〕かりに薬鐘〔ヤクシウ〕の下をもやし付

〔其場ヲハツサスヨクツケシナリ〕

轉馬〔ウマ〕を呼〔呼〕る我〔我〕まわり口

〔傳馬ハ 宿驛ニテ往来ノ荷物ヲ 馬ニテ次ノ宿驛 馬テ ヲクリトバケルモノナリ〕

いさりたる鐘〔カネ〕一筋〔筋〕に挾〔サシ〕箱

〔イキリタルハ勢ヒハケシキナリ〕

水〔水〕波〔波〕かゆる鯉〔イナゴ〕棚〔棚〕の秋

〔鯉棚ハ鯉ヲ商肆店ノコトナリ〕

さハくと切籠〔シデ〕の紙〔紙〕手に風吹〔吹〕て

奉加〔奉加〕の序〔序〕にもほのか成月

〔(ウ十二)〕

喰物〔食〕に味のつくこそ嬉〔嬉〕しけれ

煤掃〔煤掃〕うちハ次に居替〔居替〕る

目〔目〕をぬ〔ぬ〕らす禿〔カウロ〕のうそにとりあけて

〔×こひにはかたき最上〔モウジヤウ〕侍〕

〔×最上ハ羽州也〕

手〔手〕ミしか〔ミ〕に手拭〔テヌギ〕ねちて腰〔腰〕にさけ

〔○屋根ナトフキカエルサマナリ〕

花〔花〕の比昼〔比昼〕の日待〔日待〕に節〔節〕こ着〔着〕て

〔節衣〔セチブ〕ハ 佳節〔佳節〕又ハ曠〔曠〕ナルトキニ着ルヘキモノナリ

トテ アラタニ染仕立〔染仕立〕オケルモノヲ云

さ、ら〔さ、ら〕に狂〔狂〕ふ獅子〔獅子〕の春風

乙州 四

珍碩 全

里東 四

探志 全

昌房 全

正秀 全

及肩 全

野徑 全

二嘯 全

〔(ウ十二)〕

珍碩

里東

探志

昌房

正秀

及肩

野徑

二嘯

〔(ウ十三)〕

〔(ウ十三)〕

田野

疇道〔アセ〕や苗代〔苗代〕時の角〔角〕大師

〔畔〔畔〕二同 苗代吾田ノヘリナトニ 台嶽〔台嶽〕開基ノ権者

傳教〔傳教〕泰澄〔泰澄〕大師ノ惡魔〔惡魔〕降伏〔降伏〕トテ 假〔假〕リニ鬼〔鬼〕ノカタチ

正秀

ヲナセルヲ牘トナセルモノヲ世俗門戸ニ張ル 則
コノ札ヲ竹ナトニハサミテ建ヲケルナリ 其スカ
タヲ云シナリ」

明れは霞む野鼠の顔

「[△] 齧ふとのわやくに鳴し春の空

「[×] 齧太ハ鳥ノ事ナリ ワヤクハ惡罷ヲナスノ事ナ
リ」

かまゑおかしき門口の文字

月影に利休の家を鼻に懸

度く芋をもらはるゝなり

「[△] 虫は皆つゝれくと鳴やらむ秀

「[△] 虫ノナクヲツゝレサセト云ニタトヘタルナリ

堀川百首 ミちのくのけふの細ぬのをりにしかつゝ、
れさせてふ松むしの声」

片足くぐの木履たつぬる

誓文を百もたてたる別路に

「戀 誓文ハ己ケ思ヒ言ヒモシタルヒトスチノ事ヲ
カワセマシキノタメニ神佛ニ誓ヲ立ル事 多く戀
二用ユ」

なミたくみけり供の侍

「院ノ内舍人何某ノ女房ノガリ通ヘルサマ 供ノ侍
ト云ニアラハセリ」

須戸はまた物不自由なる臺所

狐の恐る弓かりにやる

月氷る師走の空の銀河

「[○] 無理に居たる膳も進まず

「[×] いらぬとて大脇指も打くれて

「[△] 獨ある子も矮鶏に替ける
江戸酒を花咲度に恋しかり

「[○] 無理に居へたる × いらぬとて大 △ 獨ある子も

コノ三句ノハコヒ イカニモ不幸ニシテ タノメ
ナキ世ニナカラヘルサマ ヲモヒヤルヘシ」

「[☆] 相 あいの山彈 春の入逢

「[☆] 相ノ山 伊勢ノ國內外ノ宮ノ間ニアリ コヽニ
小女子三弦ヲ弾キテ往来ノ者錢ヲ乞フ者有 コレ
ヲ云シナリ」

雲雀啼里は厩糞かき散し

火を吹て居る禪門の祖父

本堂ハまた荒壁のはしら組

羅綾の袂しほり給ひぬ

「羅綾ハ綾錦ノ高貴ノ召ス衣類ナリ スヘテ結構ナ
ルキモノトシルヘシ」

「^ハ 齒を痛 △ 人の姿を絵に書て
「戀ナリ」

薄雪たはむすゝき瘦たり

藤垣の窓に紙燭を挟をき

口上果ぬいにさまの時宜

たふとけに小判かそふる革袴

「山賤ナトノモノトミヘタリ」

秋入初る肥後の隈本

幾日路も管て月見る役者船

寸布子ひとつ夜寒也けり

「綿入ハカリ着タルヲ云ナリ」

沢山に元めくと吃られて

呼ありけとも猫は帰らす
子規御小人町の雨あかり

秀 碩

〔江府ノ景情〕

やしほの楓木の芽萌立

秀

散花に雪踏挽づる音ありて

碩

北野、馬場にもゆるかけるふ

秀

〔北埜 菅公ヲ勸請セシ所 洛ニアリ〕

正秀 十九

秀

珍碩 十七

碩

寺町二条

井筒屋庄兵衛板

「^{十六}終_オ」

「^{十六}終_オ」

（裏表紙）

（付記） 本稿は平成二十三年度科学研究費補助金（基盤研究(C)「『続猿蓑』と地方俳書の比較による「かるみ」の研究」課題番号21520200）の成果である。

第一冊表紙



第一冊見返し



「冬の目」十一丁裏・十二丁表

蘇州馬車と云ふ
 一舟のちりぬを
 秋のついでに
 胡曆代都上門
 血刀うく次月の傍
 芳ちりて本脚の傍七の
 白燕帰ぬ水かおと流ぬ
 十奉と三の童母りて
 杜園

「つれ」冒頭

草紙三十三
 天地下より
 元禄三六月
 越智
 越人
 花見
 水 碩 翁 曲水
 箱

